

東洋史研究

第七十七卷 第三號 平成三十年十二月發行

高麗前期王師任命と國際情勢

序論

第一章 圓空國師智宗の生涯

第一節 圓空國師智宗の生涯の概略

第二節 智宗と關係のある僧侶

第二章 光宗と穆宗時代の外交と佛教

第一節 光宗の外交と佛教

第二節 六代成宗と七代穆宗の外交と智宗

第三章 顯宗の半生と佛教

第一節 顯宗即位の背景

第二節 顯宗即位後の智宗の活動

結語

中 村 慎之介

序 論

高麗は九一八―一三九二年の四七五年に互り現在の朝鮮半島を中心とした地域に存在した國である。本稿が高麗の王師をテーマに掲げるのは、研究史上どの宗派から王師と國師が出されたかが高麗における宗派の勢力の優劣を測る基準の一つとされてきたからと^①いうだけでなく、王師に注目することで、高麗の政治に密接な關係のある佛教と外交とを有機的に結びつける新たな視座を提示することが可能となるからである。

そもそも王師とは高麗國王が弟子の禮をとる僧侶で、高麗前期には追贈した事例を除くと十八人の王師が確認される(表1)。また、高麗國王が弟子の禮をとる僧侶として國師もいた(表2)。國師と王師について、許興植と朴胤珍の研究が重要である。許興植は、高麗前期の國師と王師は國王と民衆を教化する機能を持ち、國王より形式上身分が高い存在であるが、實質的な権限を持っていない象徴的な存在であり、また國師の方が王師に比べて身分が高い存在であると理解した。^②許興植の見解が長らく通説となっていたが、これに異議を唱えたのが朴胤珍である。朴胤珍は、高麗前期の王師は國王の代わりに佛教界を統合・統制するなどの具體的な活動をしていたのに對し、國師は國王の師匠となつた高僧に與えられる、謂わば名譽稱號であると^③する説を提唱した。その上で朴胤珍は高麗前期の王師の機能について以下の四點を擧げている。

①王の延命の祈禱、祈雨祭の主催などの祈伏活動。^④
 ②僧侶たちの統合。
 ③佛教界の論争の解消を圖る。
 ④國王と民衆の教化。

朴胤珍の見解は概ね的確だと思うが、王師の機能に關する分析は靖宗七年(一〇四二)に王師に任じられた決凝以降の人物を中心に行われており、高麗前期の佛教制度が整備された光宗代―顯宗代(九四九―一〇三二)までについては坦文と^⑤惠居のみを分析の對象としている。しかし、史料状況を踏まえた時に、光宗代から顯宗代に活躍し、顯宗代に王師に任じられた智宗の分析が必須となろう。彼の一生は「高麗國原州賢溪山居頓寺故王師慧月光天遍照至覺智滿圓默寂然普化大禪

表1 高麗前期の王師

稱名	僧名	宗派	生歿年	王師在任時期	關聯寺刹	典 據
法鏡大師	慶猷	禪宗	871～921	太祖初～4	五龍寺	『總覽』
真空大師	忠湛	禪宗 (鳳林山)	869～940	?～太祖 23	興法寺	『史』卷 2
靜真大師	兢讓	禪宗	887～965	光宗 2～7	鳳巖寺	『總覽』
惠居國師 (弘濟尊者)	智□	禪宗	899～974	定宗 2～ 光宗 19	葛陽寺	『高麗佛教史研究』
法印國師	坦文	華嚴宗	900～975	光宗 19～26	普頓寺	『史』卷 2
圓空國師	智宗 (神則)	禪宗	930～1018	顯宗 4～9	居頓寺	『總覽』
大智國師	法鏡	法相宗	?	顯宗 11～ 德宗元年	玄化寺	『史』卷 4・5、『總覽』、 『玄化寺碑』
圓融國師	決凝 (慧日)	華嚴宗	964～1053	靖宗 7～ 文宗元年	浮石寺	『史』卷 7、『總覽』
慧炤國師	鼎賢	法相宗	972～1054	文宗 3～8	七長寺	『總覽』
智光國師	海麒 (巨龍)	法相宗	984～1069	文宗 10～12	法泉寺	『史』卷 8、『總覽』
景德國師	爛圓	華嚴宗	998～1065	文宗 12～20	福興寺	『史』卷 8、『高麗墓誌 銘集成』、『海麟碑』
慧德王師	韶顯 (範圍)	法相宗	1038～1096	肅宗元年 (追封)	金山寺	『總覽』
	道誥	禪宗?	827～898	肅宗代に追封	玉龍寺	『東文選』
?	德昌	法相宗		睿宗即位年～ (睿宗 2?)		『史』卷 12
惠照國師 (慧炤國師)	曇真	禪宗		睿宗 2～ 睿宗 9		『史』卷 12・13
元景王師	樂真	華嚴宗	11c 後半?	睿宗 9～(睿 宗 12 以前?)	般若寺	『史』卷 13・『總覽』
?	德緣 (德淵)	法相宗		睿宗 12～ 仁宗即位年		『史』卷 14・15、『總覽』、 『(僧)金德謙墓誌銘』
圓應國師	學一 (逢渠)	禪宗	1052～1144	仁宗即位年 ～仁宗 22	雲門寺	『史』卷 14、『總覽』
大鑑國師	坦然	禪宗	?～1158	仁宗 23～ 毅宗 12	斷俗寺	『總覽』
正慧王師	曇休	法相宗	?	(睿宗代に 活動)	?	『(僧)金義光墓誌銘』

表2 高麗前期に生前國師へ任じられた僧侶

稱名	僧名	宗派	生歿年	國師在任時期	關聯寺刹	典據
元宗大師	燦幽 (道光)	禪宗	869~958	光宗?~ 光宗9	高達院	『總覽』
惠居國師 (弘濟尊者)	智□	禪宗	899~974	光宗19~ 光宗25	葛陽寺	『史』卷2、『高麗佛教 史研究』
法印國師	坦文	華嚴宗	900~975	光宗26	普頓寺	『史』卷2、『總覽』
弘法國師	?	禪宗	?	穆宗代		『總覽』
大智國師	法鏡	法相宗	?	德宗元年 ~?	玄化寺	『史』卷5、『總覽』
圓融國師	決凝 (慧日)	華嚴宗	964~1053	文宗元年~ 文宗7	浮石寺	『史』卷7、『總覽』
慧昭國師	縣賢	法相宗	972~1054	文宗8	七長寺	『總覽』
智光國師	海麒 (巨龍)	法相宗	984~1069	文宗12~ 文宗24	法泉寺	『史』卷8、『節要』卷 5、『總覽』
惠照國師 (慧昭國師)	曇眞	禪宗	?	睿宗9~?		『史』卷13、『坦然碑』
?	德緣 (德淵)	法相宗	?	仁宗即位年 ~?		『史』卷15

表1・2は朴胤珍〔二〇〇六〕四三・四四頁、六三頁の表をベースに適宜修正を施した。また、朝鮮總督府編纂『朝鮮金石總覽』(上)は『總覽』、『高麗史』は『史』、『高麗史節要』は『節要』と略す。

師贈諡圓空國師勝妙之塔碑銘并序」(以下「智宗碑文」)に詳細に記されており、史料状況の悪い光宗代から顯宗代初期を理解する上での貴重な情報を提供する。

また、宣和五年(一一三三)に北宋から高麗を訪れた徐兢の『宣和奉使高麗圖經』卷十八、國師、には「國師の稱は、蓋し中國の僧職綱維有るが如きなり。其の上一等、之を王師と謂ふ。王見れば則ち之を拜す。(中略)阿闍梨大德。(中略)國師・三重大師は數人を過ぎざれども、阿闍梨一等は人數極めて衆し。」とあるように、國師と稱される僧侶が少數人いて、その中で最上位の者が王師であった、と記されている。つまり、この記述が實態と合致していたか乖離していたかはさて置き、徐兢の理解では、高麗佛教界の實質的なトップは王師であり、國師とも稱されていたということになり、王師に實質的な権限を認める朴胤珍の見解を補足できる。

右に佛教と外交を王師が有機的に媒介すると述べたが、ここで高麗前期において「王師が選任された宗派」・「王師であった期間」と「高麗が事大していた國」の對應關係を(表3)に示す。一般に、中國(後周や北宋)においては禪

宗が、契丹においては華嚴宗と法相宗などの教宗が、金においては禪宗が、それぞれ盛んであったとされる。(表3)を見れば一目瞭然であるが、光宗代の坦文(華嚴宗)、顯宗代の智宗(禪宗)・法鏡(法相宗)、そして睿宗代の曇眞(禪宗)の四例を例外とするものの、大筋として「王師任命は高麗が事大していた國で盛んであった宗派から選ばれる傾向がある」ということを指摘できよう。

王師をめぐる許興植・朴胤珍の議論は高麗という一國の枠組みの中で行われており、高麗をめぐる國際情勢と高麗佛敎界の關係がほとんど考慮されていない。高麗の王師任命と事大先との相關性を切り口とすることで、許興植・朴胤珍が明らかにした王師制度に對する理解をより一層深められよう。

本稿では、高麗前期の佛敎制度が整備されつつあった光宗～顯宗の時期に活動した智宗に焦點を當て、當該時期における佛敎と高麗の政治との關わりを整理する。第一章では一次史料である「智宗碑文」に基づいて智宗の一生を概観する。さらに、智宗が交流した僧侶についても整理することで、當時の人的交流の一端を復元する。上述したように、高麗の外交關係と王師任命に一定程度の相關性が見られることから、第二章から第四章では、高麗が置かれた國際情勢にも配慮しながら王權と佛敎のあり方を考察することとする。第二章では光宗～穆宗代における高麗の外交と佛敎についてそれぞれ整理する。光宗は後周と北宋に事大し、安定した國際關係のもとに中央集權化を圖った。こうした狀況が變化したが、成宗代における契丹の侵攻である。契丹の武力行使に屈した高麗は北宋との事大關係を清算し、契丹に事大した。この時の智宗の活動と外交關係を整理する。第三章では、智宗の王師任命から死後にかけての高麗の外交と佛敎とを概観する。紆餘曲折を経て、高麗は北宋から契丹へと事大先を變えることとなる。これと期を同じくするように、智宗を最後に凡そ八十年間、禪宗から王師が選任されなくなり、華嚴宗と法相宗から王師が選任されるようになる。法鏡の王師任命と對契丹戰時體制の解除に至るまでの高麗の政治・外交史を整理し、高麗の外交方針と僧侶の登用の相關性について示したい。

表3 「王師が選任された宗派」・「王師であった期間」と「高麗が事大していた國」の對應關係

西暦	945	946	947	948	949	950	951	952	953	954	955	956	957	958	959	960
王師(禪宗)																
王師(教宗)																
事大先(中國)	後晉(～947)			後漢(948～950)			後周(951～960)									

西暦	961	962	963	964	965	966	967	968	969	970	971	972	973	974	975	976
王師(禪宗)																
王師(教宗)																
事大先(中國)	北宋(963～995)															

西暦	992	993	994	995	996	997	1010	1011	1012	1013	1014	1015	1016	1017	1018	1019
王師(禪宗)																
王師(教宗)																
事大先(中國)	北宋(963～995)						契丹(995～1012?)									
事大先(契丹)	契丹(995～1012?)															

西暦	1020	1021	1022	1023	1024	1025	1026	1027	1028	1029	1030	1031	1032	1033	1034	1035
王師(禪宗)																
王師(教宗)																
事大先(中國)	契丹(1021～1116)注・德宗即位年(1031)から1038年まで契丹聖宗の太平年號を使用。															
事大先(契丹)	契丹(1021～1116)															

西暦	1040	1041	1042	1043	1044	1045	1046	1047	1048	1049	1050	1051	1052	1053	1054	1055
王師(禪宗)																
王師(教宗)																
事大先(契丹)	契丹(1021～1116)															

西曆	1056	1057	1058	1059	1060	1061	1062	1063	1064	1065	1066	1067	1068	1069	1070
王師(禪宗)															
王師(教宗)															
事大先(契丹)	契丹(1021~1116)														

西曆	中略															
	1100	1101	1102	1103	1104	1105	1106	1107	1108	1109	1110	1111	1112	1113	1114	1115
王師(禪宗)																
王師(教宗)																
事大先(契丹)	契丹(1021~1116)															

西曆	1116	1117	1118	1119	1120	1121	1122	1123	1124	1125	1126	1127	1128	1129	1130
王師(禪宗)															
王師(教宗)															
事大先(契丹)	契丹														
	中略														

西曆	中略														
	1141	1142	1143	1144	1145	1146	1147	1148	1149	1150	1151	1152	1153	1154	1155
王師(禪宗)															
王師(教宗)															
事大先(金)	金(1142~)														

西曆	1156	1157	1158	1159	1160	1161	1162	1163	1164	1165	1166	1167	1168	1169	1170
王師(禪宗)															
王師(教宗)															
事大先(金)	金(1142~)														



: 禪宗



: 教宗

第一章 圓空國師智宗の生涯

西暦一〇一八年の高麗は原州。北西を漢河の支流が流れ、新羅の古都・慶州と高麗の首都・開京とを結ぶ、交通の要所であるこの地に、居頓寺という壮麗な寺院があった。この寺において、今まさに一人の男の命が盡きようとしている。男の名前は智宗。死期を悟った彼は、周りを圍む弟子たちに向かって最期の言葉を發した。「昔、如來は大法眼を以て諸弟子に付し、是くの如く展轉して、乃ち今に至る。今此の法を將て汝に付囑せん。汝當に護持して、斷絶せしむる無かれ。吾が滅後も亦た喪計を以て奏聞し、規矩を亂すこと有るを得ず」と。そして、言終わるや靜かに息を引き取った。⁽⁹⁾

死から逃れられない運命にある我々にとって、なるほど「ありふれた」一人の人間の死の場面にすぎないのかもしれない。しかし、智宗の人生は激動の高麗前期を象徴するものであり、また智宗の死は一つの時代の轉換點となっている。それが如何なる意味であるか、本稿で示したいと思う。そのためにも本章では、決して知名度の高くない智宗の人生を概観することとしたい。

第一節 圓空國師智宗の生涯の概略

本節では先行研究と「智宗碑文」などに依據しながら、智宗の経歴と關聯する僧侶・國王を整理する。「智宗碑文」が
 出典の場合、煩を避けて出典を一々示さないこととする。

智宗は太祖十三年（九三〇）に生まれた。俗姓は李氏、字は神則、全州人。八歳のときに舍那寺の弘梵三藏のもとで出家し、弘梵三藏の歸國後は廣化寺の景哲和尚のもとで修行する。弘梵三藏は西天竺人⁽¹⁰⁾で、後述するように後晉から政治的使命を帯びて高麗に來た、いわば外交僧である。景哲和尚については他に記録がなく、不詳である。智宗は開運三年（後晉、九四六）、十七歳の時に靈通寺の官壇で受戒する。次いで廣順三年（後周、九五三）、智宗は鳳巖寺の超禪師に師事する。

この超禪師は靜真大師兢讓碑文にある迥超禪師に比定されている¹²⁾。その後、智宗は顯徳初に僧科に及第した。顯徳年間（光宗五〜十一年（九五四〜九六〇））にあたり、この記録は高麗における僧科實施の確實視される最古の例である¹³⁾。光宗九年（九五八）は高麗で初めて科擧が實施された年である（『高麗史節要』卷二、光宗九年夏五月條）。科擧と僧科の關係については、科擧が地方の（世俗の）人材を中央に登用するシステムであるのに對し、僧科は地方の僧侶を中央に登用するシステムであり、兩者は中央集權化を目指した光宗の目玉政策であった¹⁴⁾。また、この時の僧科に智宗と共に及第した同期は全員が中國へと留學したとされる。智宗は當初留學の意思がなかったようであるが、夢に出てきた故・證真大師燦幽に背中を押されたのを「きっかけ」に留學を決心し、翌年、顯徳六年（後周、九五九）に留學することになる。高麗を出國し吳越國に到着した智宗は永明寺の延壽禪師のもとに參じ、峻豐¹⁵⁾二年（高麗、光宗十二年、九六一）に國清寺の淨光大師のもとに參じて修行する。開寶元年（北宋、九六八）には贊寧らの要請に従い、傳教院にて『大定慧論』・『法華經』を講じる。そして、中國に渡り十二年目となる光宗二十一年（九七〇）、再び夢に出てきた燦幽の勧めに従い歸國を決意する。

高麗に歸國した智宗は光宗の歡待を受けて大師に任じられ、金光禪院に居住する。光宗末年にあたる二十六年（九七五）には重大師に除せられ、磨衲袈裟を賜る。同年光宗が亡くなり景宗が即位すると三重大師に除せられて水精念珠を賜る。成宗代には積石寺に移る。淳化年間（北宋、九九〇〜九九四）には成宗に招かれて藥宮に出入りするようになり、成宗の胸の内を明かされたという。穆宗代（在位九九七〜一〇〇九）には法號が光天遍炤至覺智滿圓默禪師となり、佛恩寺・護國外帝釋院などの住持を歷任する。

顯宗（在位一〇〇九〜一〇三二）が即位すると、大禪師に除せられて廣明寺に住むようになり、また「寂然」の法號が追加される。そして開泰二年（契丹、一〇一三）には王師に任じられる。顯宗七年（二〇一六）には法號に「普化」を追加する。この年に風痾を患い、顯宗に歸山を勧められるが拒否して留まる。二年後の天禧二年（北宋、一〇一八）四月に顯宗に暇乞いをして原州の賢溪山居頓寺に留まり、十七日に當地で入寂する。享年八十九歳、臘七十二年。智宗が亡くなる直

前の顯宗九年四月七日には「黃霧」が発生し、京城の多くの者が熱病を發症したため醫師を派遣する事態になっており、これが智宗の死を誘發したのであろう。塔碑は太平乙丑（契丹、太平五年。一〇二五）に建てられた。

第二節 智宗と関係のある僧侶

本節では、「智宗碑文」に記された僧侶について整理する。碑文に記された人物は、主人公である智宗の生涯に重要な影響を与えたと考えられるからである。

(i) 高麗國內の僧侶

高麗國內では①弘梵三藏②景哲和尚③迥超禪師④證眞大師（元宗大師燦幽）の四人が言及されている。このうち②景哲和尚は他に史料が残っておらず不明である。

①弘梵三藏

弘梵三藏に関しては、李龍範（一九八九）の考證により、高麗太祖と後晉の関係を仲介した天竺出身の僧侶であることが明らかにされている。なお、李龍範は『舊五代史』殿版を使用していたようであるが、避諱に氣附かなかったため考證が煩雑になっている。本稿では中華書局本を用いることとする。

『資治通鑑』に、新羅・後百濟を破り朝鮮半島全域を支配することとなった高麗の太祖王建と手を組み契丹を挾撃するよう提案した西域僧襍囉が出てくる（『資治通鑑』卷二百八十五、後晉紀六、齊王開運二年條）。この箇所（17）の胡三省の注に引用する宋白『續通典』に據れば、『資治通鑑』の西域僧は火を用いた占いが得意であり、天福年間（九三六～九四四年）に後晉を訪れ、その後高麗に向かい、高麗の太祖王建に禮遇され、王建による契丹挾撃の提案を皇帝に伝えるために中國へ戻ったという。（18）これに關聯して『舊五代史』卷七十六、晉書二、高祖紀二、天福二年正月丙寅條を参照すると、天福二年、

舍衛國 (Skṭ. Śrāvastī) の大菩提寺の三藏阿闍梨沙門・室利縛羅が後晉に滞在しており、弘梵大師の號を授かったことが記されている。⁽¹⁹⁾

一方、西域僧祇囉が訪れたとされる高麗側の史料を確認すると、『高麗史』卷一、太祖二十一年(九三八)三月條に、摩竭陁國大法輪菩提寺の沙門である弘梵大師唵哩嚩日羅が高麗を訪れたことが記されている。⁽²⁰⁾

『資治通鑑』の「襍囉」、『舊五代史』の「室利縛羅」、『高麗史』の「唵哩嚩日羅」はサンスクリット語で「金剛」を意味する vāira の音寫であり、また「唵哩嚩日羅」と「室利縛羅」は「榮耀金剛」と譯される Śrīvara の音寫に違いない。このことから、『資治通鑑』・『舊五代史』・『高麗史』の三つの史料が記すところの西域僧は同一人物であると推定できる。弘梵大師は高麗太祖と中國皇帝を結びつける存在であったと言える。そして、この弘梵大師は智宗の師匠となったことが「智宗碑文」から分かる。⁽²¹⁾

③ 曠陽山鳳巖寺迥超禪師・靜眞大師兢讓の弟子

超禪師は靜眞大師兢讓碑文にある迥超禪師であると推定される。⁽²²⁾ 迥超禪師について、兢讓の弟子である以上のことは不明である。しかし、智宗が迥超禪師のもとに参じたのは兢讓と關わりを作るためであった可能性が指摘されていることから、兢讓について以下に簡単に述べることとする。⁽²³⁾

兢讓は俗姓王氏、公州出身。光化三年(九〇〇)中國へ渡り石霜の嗣法である道縁の元に参ず。二十四年間中國で修行した後、同光二年(九二四)高麗に歸國する。歸國後は太祖・惠宗・定宗の歸依を受け、光宗元年(九五〇)に光宗の要請で入京すると翌光德二年(高麗、九五二)王師に任じられたと理解されている。そして、二年後の廣順三年(九五三)兢讓は鳳巖寺に歸山する。⁽²⁴⁾ まさにこの年、智宗は迥超禪師のもとに参じている。⁽²⁵⁾ 金龍善は智宗が迥超のもとに参じたのは、迥超の師匠である兢讓と面識を持つたためではないかと推測している。⁽²⁶⁾

④ 驪州高達寺元宗大師燦幽⁽²⁶⁾

證真大師は光宗即位後に證真大師の號を賜った元宗大師燦幽に比定される⁽²⁷⁾。燦幽、俗姓金氏、字は道光、雞林河南出身。眞鏡大師審希の嗣法である融諦禪師に師事し、景福元年（八九二）に中國へ渡り、投子大同に參ず。投子大同は翠微無學の嗣で石頭希遷の法燈。燦幽は投子大同の元を去ると中國諸山の名利を訪ね、貞明七年（後梁、九二二）に高麗に歸國する。以後太祖から光宗まで歴代國王の歸依を受け、光宗が即位すると證真大師の號を賜り、舍那院に迎えられ、重光殿で法筵を開き國師に任じられる。顯德五年（九五八）死去。智宗は夢に現れた元宗大師の意見に従い、中國留學と高麗歸國を決意している。智宗が留學を決意する年の前年に元宗大師は死亡しているが、生前の元宗大師と智宗は何かしらの面識があつたであろう。しかし他に兩者の關係を示す史料はなく、詳細は不明である。

(ii) 中國の僧侶

智宗は留學した吳越において、現地の僧侶から教えを受けている。以下では⑤永明延壽⑥淨光禪師⑦贊寧の三人について整理する。

⑤ 永明延壽⁽²⁸⁾

永明延壽は俗姓王氏。『宋高僧傳』は錢塘の人とし、『景德傳燈錄』は餘杭の人であるとする。始め翠巖に師事して修行に勵み、後に天台山に赴き天台德韶に認められて禪宗の法眼宗の法を嗣ぐ。『景德傳燈錄』によれば、天台德韶はこの時吳越國第五代國王錢弘俶と延壽が密接な關係を持つことを豫言したとされる。延壽は嗣法の後、雪竇山の住持となり、建隆元年（九六〇）に錢弘俶に請われて杭州の靈隱寺の第一世となり、その翌年には再び錢弘俶の招聘を受けて永明寺（淨慈寺）に移り、晩年の十五年を過ごした。錢弘俶の要請に應じて方等懺や放生を行ったほか、人々に佛像・佛塔の建立を勧め、一日に六度の散華をし、一萬人以上の人々に戒律を授けた。また執筆活動に精を出し、『宗鏡錄』百卷を始めとす

る多くの著作を残した。高麗の光宗は『宗鏡錄』を讀んで感激し、親書を送って弟子の禮を取り、留學生を派遣して延壽の法を高麗に傳えたという。開寶九年（九七六）遷化。贊寧は延壽が錢弘俶の最も敬うところの僧侶であったと記述している。⁽²⁹⁾

⑥ 淨光禪師

淨光禪師は錢弘俶に「淨光大師」の號を賜った義寂に比定出来る。義寂は俗姓胡氏、温州永嘉の人。出家して會稽山で南山鈔を學び律義に習熟すると天台山へ行く。當時の中國佛敎界は安史の亂から三武一周の法難の間に多くの經典が散逸していたため、義寂は天台徳詔に頼み錢弘俶を通じて日本と高麗に散逸佛典を求めさせた。『宋高僧傳』では日本のことだけが擧げられるが、『景德傳燈錄』や『佛祖統紀』によれば、この時高麗に散逸佛典を求めたことが記されている。⁽³⁰⁾この點に關しては後述する。散逸佛典が義寂のもとに届くと、佛隴道場・國清寺で教鞭をとり、螺溪道場を興すと各地から學僧が集まったという。雍熙四年（九八七）十一月四日遷化。享年六十九歳、法臘五十。義寂は平素から法華經と玄義を講義し、その他にも二十餘りの講座を持っていた高名な學僧であった。⁽³¹⁾義寂の元へは中國國外からも弟子が集まり、嗣法したのは高麗人の義通であったという。⁽³²⁾また、『佛祖統紀』卷八、興道下八祖紀第四、において義寂は第十五祖として立傳されているように、後世大いに顯彰された僧侶であった。

従来の研究はいずれも延壽と智宗との師弟關係に注目していたが、延壽の元では一年弱、義寂の元では十年間修行しており、單純に期間だけを考へても、延壽よりは義寂との關係を重視すべきであろう。

⑦ 贊寧⁽³³⁾

贊寧は俗姓高氏、渤海人。『宋高僧傳』の作者としても有名である。後唐天成中（九二六―九三〇）杭州の祥符寺（今の龍興祥符戒壇寺）で出家し、清泰初年（九三四）に天台山に入り具足戒を受けて四分律を習い、南山律に通じた。清泰二年（九三五）十七歳の時に、天台山平田寺で修行していた新羅人の道育と石梁で同宿しており、若い頃より朝鮮半島の僧侶

と交流があったことが分かる。吳越國が北宋に接收されると、贊寧は淳化元年（九九〇）に左街講經首座、翌年史館編修、また至道元年（九九五）知西京教門事、咸平元年（九九八）右街僧錄に陞る。³⁵ 歐陽脩『歸田錄』卷一には、贊寧が北宋の太祖に「皇帝は燒香するのみで佛を拜まなくてもよい」と對えて氣に入られた話がある。³⁶ その他にも、太祖の疑惑の死の後に即位した太宗から史館編修に任じられたことの意義は殊の外大きいと思われる。贊寧は北宋の太祖と太宗からの信任が厚い名僧であった。

その贊寧の要請で智宗が『大定慧論』・『法華經』を講じた傳教院は註(16)に示したように、同國人であり義寂の高弟でもある義通に關係が深い。義通と智宗に面識があつたか直接言及はされていないが、義寂と贊寧を媒介として両者が關係を持ったと考えるのが自然であろう。

本章の記述をまとめると、智宗は高麗國內の高僧（特に國王との關係の深い僧）とだけでなく、中國の高僧とも親密な關係を持っており、また中國在任の朝鮮半島出身僧侶との關わりもあつたということになる。こうした人脈は高麗に歸國した後に智宗が活躍する背景となつたに違いない。

第二章 光宗〜穆宗時代の外交と佛教

先述したように、高麗前期の「王師と宗派の關係」と「高麗の外交關係」には、ある程度の相關關係が認められる。このことは言い換えると、「高麗の外交方針と僧侶の登用に相關性が見られる」ということである。

高麗前期は次々と勃起する中原の王朝や契丹とどのような關係を築くかが、王權の正統性や軍事に關わる大きな課題となつた。そして、この時期の佛教界においても「外交」という場が重視されていたのである。従來の韓國人研究者が特に見過ごしてきたこの點を示したい。

第一節 光宗の外交と佛敎

四代光宗（在位九四九～九七五）は高麗建國以來の政治課題であつた中央集權化に積極的に取り組んだ國王である。量田（光宗六年、九五五）・奴婢按檢法（光宗七年、九五六）を實施して豪族の力を抑壓すると共に、官僚制度を整備して中央の權力基盤を擴大した。これら一聯の政治改革は光宗の改革と稱されて研究者の注目を集めてきた。本稿との關聯でいえば、光宗の改革は歸法寺の均如の支援のもとに推進され、結果として光宗代に華嚴宗が躍進したという理解が通説となつている。以下では光宗代の外交と佛敎の關係について整理する。

（i）光宗の改革と外交

光宗は峻豊・光徳という独自の年號を定め、開京を皇都と改稱し、自身を「皇帝」と稱するなど、中國の皇帝を頂點とした國際秩序に對して独自の姿勢を示した。こうした光宗の姿勢は、高麗の獨自性を強調しがちな韓國の學界で注目を浴びた。ただし、光宗の改革は後周から使節團の一員として高麗に來た雙翼をブレーションとして行われた。例えば、雙翼の提案に基づいて光宗九年（九五八）に科擧を導入し、ついで光宗十一年（九六〇）に百官の公服を定めて中央官人の身分とその序列を可視化した。またこの頃、官僚の位階として中國式の文散階が導入されている。こうした光宗の改革は後周の政治改革を意識したものであるという指摘があり、高麗の自立性を強調することにはひとまず慎重でありたい。そもそも光宗は中國の文化や人物を重視した國王として知られている。⁽³⁷⁾⁽³⁸⁾

(ii) 光宗と中國佛教界の交流

① 華嚴宗

光宗と佛教の關わりとして特筆されるのが、華嚴宗の均如の登用である。高麗草創期の華嚴宗は高麗の太祖王建を支持する北嶽派と後百濟の甄萱を支持する南嶽派で對立していた。こうした對立を解消したのが均如であり、光宗の改革は均如を代表とする華嚴宗の支援のもとに推進されたとされる。⁽³⁹⁾

ところで、均如が光宗に認められたきっかけは、光宗四年（九五三）に後周の使節が来て光宗を冊封する際、均如が晴乞いをして見事に晴れ舞臺の用意に成功したことであるとされる。⁽⁴⁰⁾ 均如はこれ以降頭角を現わし、光宗の改革に協力した。王權と佛教の關係において、「中國との外交の場」が重視されていたことがここでも確認される。これに關聯して、會昌の廢佛（八四一～八四六）によって打撃を受けた中國の天台宗が復興する契機として、高麗からの經典の「逆輸入」が大きな役割を果たしたとされることに注目したい。⁽⁴¹⁾

『佛祖統紀』によれば建隆元年（九六〇）吳越王錢俶（錢弘俶）が散逸した教乘論疏を高麗と日本に求め、それを受けて翌建隆二年に高麗から派遣された諦觀により天台論疏が齎されたという。⁽⁴²⁾ この『佛祖統紀』は十三世紀に編纂された史料であり、史料として扱う際には注意を要する。より史料價値が高い『宋高僧傳』には高麗について言及がなく、また『宋高僧傳』とはほぼ同時期に成立した『景德傳燈錄』には日本への言及がない。ここで建隆二年はまさに智宗が延壽のもとを離れて國清寺の義寂のもとへ向かった年であることに注目すべきである。先學が明らかにしたように、もともと延壽と天台は關係が深い。⁽⁴³⁾ 吳越王く延壽く天台（天台德詔、義寂）というルートを智宗が活用して天台論疏を齎した蓋然性がある。螺溪が國清寺の義寂を指すこともそれを裏附ける。外交使節は史書に名前が残された者達だけでなく、ある程度の規模の人員で構成される。諦觀は正使として名が残ったが、名前が残らなかつた智宗は使節團の一員として行動を共にしたのである。「智宗碑文」から『佛祖統紀』の記述は信用に足ると言えよう。少なくとも、「智宗碑文」と『佛祖統紀』

は矛盾しない。竺沙雅章は佛典を驅使して高麗から佛典が送られたとする『佛祖統紀』の記述の正しさを證明しようとしたが、當の高麗側の史料である「智宗碑文」からも竺沙の見解を補強出来るのである。餘談であるが、諦觀は義寂に出會うと心服してすぐさま弟子入りし、螺溪に留まること十年で亡くなったという⁽⁴⁴⁾。諦觀が亡くなったのは智宗が義寂のもとを離れて高麗に歸國した時期と一致しており、智宗の歸國は諦觀の死に何らかの關係があるように思われる。

高麗の經典が中國に輸出された九六一年に前後して高麗國內における華嚴宗の存在感が強まるのは、「中國への經典輸出」の副産物として「高麗國內において教宗の存在感が増した」ということであろう。華嚴宗の躍進について、從來は内政との關係が重視されていたが、外交での活躍にも注目すべきである。そして、この時活動したのは禪僧の智宗であった可能性が高く興味深い。

② 禪宗

高麗建國時より高麗國王と關係が深かったのは禪宗であった。從來、光宗代に華嚴宗が擡頭したことで相對的に禪宗の地位が低下したとされるが、それでもなお、禪宗は從來同様に勢力を保っていた。そのことは禪宗の兢讓・惠居が王師に任じられた點、光宗代に初めて制度化された僧科を主催したのが惠居であった點、現存する碑文のうち太祖・光宗代（九一八〜九七五）に建立された高僧碑文は十九例あるが、これらが全て禪僧のものである點からも明らかである。

また「元宗大師碑文（碑陰）」には、乾德九年（九七二）元和殿において大藏經を開讀した際に、高達院・曠陽院・道峯院の三寺院だけは門下弟子に住持を相續させ、代代絶えないようにする旨の詔を光宗が下したと記されている⁽⁴⁷⁾。このことから、光宗と高達院（元宗大師燦幽）・曠陽院（靜眞大師兢讓）といった禪寺との關係の深さが窺えよう。そして光宗は永明延壽のもとに智宗らを派遣しているが、これに關係して、『宋高僧傳』には光宗が延壽の著作を讀んだことに觸發されて延壽に物品を贈っていることが記されている⁽⁴⁸⁾。延壽の思想が同時期の高麗に傳わっていたことに關して、「元宗大師碑文」文中の「佛生天竺、爲世上之歸依、俾君子之邦學法王之道。所謂道非心外、佛在身中。故得道之尊爲導師、德之

厚爲慈父。」のうち、傍線部「所謂 道非心外、佛在身中。」という表現に注目したい。この箇所は『宗鏡録』巻第六、「又碑詞云。法性平等、實慧虛通。我同於異、人異於同。不壞於有、無取於空。道非心外、佛卽心中。」という文章を踏まえた表現である。元宗大師の歿年は顯徳五年（九五八）である。「元宗大師碑文（碑陰）」によると、「元宗大師碑文」の碑塔建設が開始されたのは光宗十七年（九六六）で、完成は景宗二年（九七七）であるが、塔が建立されたのは開寶八年（九七五）であるので、碑の傍線部の部分は九五八―九七五年までの期間に作成されたことになる。「所謂」という言葉から「道非心外、佛在身中。」という表現は遅くとも「元宗大師碑」が建立された九七五年時点の高麗において既に定着していたと言える。このことから、延壽の著作や思想が光宗代に高麗に齎されていたことが實證されるのである。

前述したように、高麗が吳越王の求めに應じて佛典を送った際、國清寺に佛典を届けた一人に智宗が含まれる可能性が高い。智宗は歸國後に光宗の歡待を受け、金光禪院に住し、大師・重大師の僧階を與えられ順調に出世していくのであるが、それは義寂や贊寧に認められた高い學識だけでなく、吳越國と高麗の佛典を媒介した外交の場における功績が認められたからである。

第二節 六代成宗と七代穆宗の外交と智宗

(i) 成宗と穆宗代の外交問題

光宗の改革は反對派を厳しく處罰し社會不安を醸し出したが、光宗が死んで息子の景宗が即位すると、仇討ちを認めたことにより高麗國內で大混亂が起⁽⁵⁰⁾こる。景宗が景宗六年（九八一）に危篤に陥ると、景宗の息子である王訟（後の七代穆宗）が幼年であったことから、景宗の従兄弟である王治が即位して六代成宗となった。高麗國內の混亂を収めるために成宗は即位直後に廣く政治に關する意見を求め、崔承老の「時務二十有八條」に従い政治改革を斷行した。なかでも、成宗による官制改革は、高麗における中央集權政策の一つの到達點として評價されている。成宗元年（九八二）の官制改革で

は中國唐朝の三省六部の體制が初めて全面的に採用される。この時、その官署名・官職名が宗主國である北宋の制度の名稱ではなくて寧ろ儒教古典に直接依據した名稱を採用している點に、上國である北宋の制度を敬避して皇帝の禮を犯すまいとする高麗の諸侯國としての自意識が明示されている。⁽⁵¹⁾このように成宗は高麗國內の安定を推進したが、鴨綠江流域の女眞族の歸屬を巡る契丹との外交問題に直面した。

成宗十二年(九九三)、高麗は契丹の大規模な侵掠を受ける。高麗首腦陣の中には全面降伏を主張する者も現れたが、結局は徐熙の外交交渉が功を奏し、北宋との事大關係を解消して契丹へ服屬することと引き換えに契丹兵を引かせることに成功した。⁽⁵²⁾翌年契丹の年號を始めて使う。成宗十四年(九九五)に成宗は再び官制改革を行っているが、この時に三省六部の官署名・官職名も一律に中國唐制の呼稱に改められている。これは「中華」の權威を體現することで國內體制の刷新、及び失墜した權威の回復を圖つたものであると理解されている。⁽⁵³⁾

契丹には北宋との提携を切ることを約束した高麗であったが、その言葉とは裏腹に成宗十三年(九九四)六月、北宋に使節を派遣して契丹征伐を願ひ出た。⁽⁵⁴⁾しかし挾撃の提案は北宋に拒絶され、ここに高麗の二面外交は失敗に終わる。以降、七代穆宗の末年まで、契丹に従屬する形で高麗と契丹の友好關係が續くのである。⁽⁵⁵⁾

(ii) 成宗と穆宗代の佛教と智宗の活動

八關會や燃燈會などを停止し、また新たな寺院建立も見られなかつた成宗の治世は、高麗史上唯一抑佛政策が實行されたと評されている。⁽⁵⁶⁾しかし成宗の後を繼いだ穆宗が即位すると、成宗が廢止した八關會や燃燈會といった國家的佛教行事が復活し、寺院の創建も再開された。また『高麗史』には康兆によって弑された穆宗の葬儀の様子が描かれている。⁽⁵⁷⁾それは佛式の葬儀であり、このことからも當時の高麗で佛教の影響力が強かつたことが伺える。こうした時代背景のもと、智宗がどのような活動をしていたのかを確認する。

先述したように、成宗は高麗の歴代國王で唯一抑佛政策を行った國王であるとされる。ところが、契丹・北宋との外交問題が深刻化した淳化年間（九九〇～九九四）、智宗は成宗から宮中に呼ばれている。⁽⁶¹⁾高麗の歴代國王で唯一抑佛政策を行った國王である成宗がこの時期に智宗と接觸を持つ理由を明らかにする手がかりとして、『佛祖統紀』の以下の記事に注目したい。

（淳化元年）高麗國王治（成宗）、遣使して『大藏經』並びに「御製佛乘文集」を賜はらんことを乞ふ。詔して之を給ふ。（中略）（淳化四年）高麗國王治、遣使して『藏經』『御製文集』を賜はるを謝す。⁽⁶²⁾

ここから、淳化元年と淳化四年に高麗から使節が送られてきたことが分かる。「御製佛乘文集」は端拱元年（九八八）に箋釋され、翌端拱二年（九八九）に下賜され始めたものである。⁽⁶²⁾こうした情報が即位後に高麗に渡っていたことに驚きを禁じえない。

前述したように、北宋において贊寧が淳化元年（九九〇）に左街講經首座、翌年に史館編修に任じられており、また、贊寧は宋太宗と近い関係にある。それに加えて智宗は贊寧と面識があることを念頭に置くと、北宋からの『大藏經』と「御製佛乘文集」の輸入に際して贊寧から宋太宗への取りなしを期待して、宮中へ智宗が呼ばれたと解釋すべきであろう。⁽⁶³⁾しかし、淳化元年に使節が中國へ到着して、謝禮の使節が派遣されるまでに三年の間隔があることに疑問がある。ちょうど高麗はこの淳化四年に契丹から侵掠を受けており、翌年に北宋へ契丹挾撃の提案をしていることを勸案すると、『佛祖統紀』の記事はこうした外交問題に關する事前交渉の使節であった可能性がある。いずれにせよ、成宗によって宮中に招かれたのは外交に關わることであろう。

穆宗が即位すると智宗の法號は光天遍照至覺智滿圓默禪師となり、佛恩寺・護國外帝釋院などの住持を歴任している。⁽⁶⁴⁾

高麗の重要な寺院の住持をしているように、穆宗代にも智宗が重用されていた。ところが、穆宗代には高麗佛教界の勢力圖に變化が起きている。穆宗即位後に建立された寺院である崇教寺は法相宗の寺院であり、法相宗が頭角を現したことが分かる。さらにここで京都國立博物館が所藏する紺紙金字大寶積經の奥書に注目されたい。

大寶積經卷第三十二

菩薩戒弟子南瞻部洲高麗國應天啓聖靜德王太后

皇甫氏

大中大夫尙書左僕射判三司隴西縣開國男食邑三百戶金

致陽

同心發願寫成金字大藏經

統和二十四年七月 日 謹記

書者崔 成朔

用紙十六幅

初校花嚴業了眞炤世大師

曇昱

重校花嚴業大師

緣密

この史料から、當時高麗の政治の實權を握っていた千秋太后・金致陽⁽⁶⁷⁾と華嚴宗との關係の深さが伺える。契丹に事大することを決めたのと時期を同じくして、國王と法相宗・華嚴宗が接近しているのであるが、一方で禪宗も智宗がそうであるように相變わらず重用されている。こうした状況は禪教並立の時期であつたとされる高麗前期の佛教のあり方を示すものと言えよう。そして、こうした状況を齎したのは國際情勢の變化であつた。

第三章 顯宗の半生と佛教

一〇〇四年に北宋（眞宗）と契丹（聖宗）の講和が成立する。これが史に名高い澶淵の盟である。⁽⁶⁸⁾ 澶淵の盟の結果、宋の對高麗政策が消極化し、反對に契丹の對高麗政策が積極化する。後顧の憂がなくなった契丹は高麗に對して強硬な態度を取ることが可能になったからである。こうした國際情勢の變化の中、高麗では康兆の亂が發生して穆宗が廢位され、顯宗が即位する。

第一節 顯宗即位の背景

成宗が亡くなり穆宗が即位すると、穆宗の母である千秋太后の垂簾聽政が始まる。千秋太后は自身の外戚である金致陽らを登用して權力基盤とし、また金致陽と私通して子供を産んだ。⁽⁶⁹⁾ 千秋太后は金致陽との間に生まれた子供を王太子に冊立するため、候補者を殺害もしくは出家させて王位繼承者から外すことを目論んだ。そのため、太祖の第八子の王郁と五代景宗の妃の一人で千秋太后の姉妹でもある獻貞王后との不適切な關係の末に生まれた王詢（後の八代顯宗）は穆宗三年（一〇〇〇）もしくは穆宗四年（一〇〇一）、千秋太后によって出家させられている。⁽⁷⁰⁾ 不義の子として生まれた王詢であったが、彼は千秋太后の壓力で出家するまで宗室に籍を置いており、王位繼承の資格があったと推測できる。⁽⁷¹⁾

(i) 康兆の亂

穆宗十二年（一〇〇九）正月壬申、燃燈會の火が千秋殿に延焼する事件が起きてから穆宗は病と稱して群臣との面會を拒否する。穆宗は蔡忠順、崔沆と密議して皇甫僉義を派遣して王詢を神穴寺から迎えさせた。この時の事情について、『高麗史』蔡忠順傳には、金致陽が密かに劉忠正に穆宗暗殺を唆して千秋太后と金致陽との間に生まれた子供を王位につ

けることを劃策したが、劉忠正が翻意して穆宗に計劃を打ち明けた、と記されている。こうした王宮内の動きとは別に、二月に西北面都巡檢使の康兆が擧兵する。開京を攻略した康兆は穆宗・千秋太后・蔡忠順・劉忠正を法王寺に移す。その後すぐに皇甫翕義が詢を奉じて開京に至ると、穆宗を廢した。これが所謂「康兆の亂」である。康兆の亂の結果、千秋太后は實家の黃州へ流され、穆宗は廢位の後に殺され、そして王詢が即位して高麗八代國王顯宗となった。⁷²⁾

即位した顯宗を待っていたのはクーデターの善後處理（内憂）と契丹聖宗の親征（外患）である。そして顯宗はその治世を通して契丹との關係に苦心することになる。

(ii) 契丹聖宗の親征

本論の理解のために契丹聖宗の親征に關する知識は必要不可欠なので、經過について先行研究⁷³⁾に依據して整理する。

康兆の亂直後の顯宗即位年（一〇〇九）二月、康兆は中臺使（中臺省長官）となり出納・宿衛・軍事の機務を掌ると、使節を契丹に派遣し、穆宗の喪と新王の即位を告げた。また四月には契丹皇太后の生辰を賀する常例の使節も派遣する。統和二十七年（一〇〇九）十二月に契丹皇太后蕭氏が崩じると、翌年四月に乾州に葬られたが、この際に高麗から弔祭と會葬の使節が契丹に赴いている。高麗は、これまで通りの契丹―高麗關係を續けることを目指した。しかし五月、契丹聖宗は高麗征伐の詔を下す。顯宗元年（一一〇一〇）七月、契丹聖宗の詔を齎した使節が高麗に到來し、前王穆宗が廢位された理由が問われる。これに對し、高麗は八月に契丹へ使節を派遣し、また九月には秋季問候の常例の使者を派遣し、同時に特使を東京に派遣して好を修めさせたが聖宗は高麗征伐を翻意しなかった。

十月に至り、高麗は康兆を行營都統使に任命し、三十萬と稱する大軍を率いて通州に駐屯させ迎撃體制を整える。その一方で講和の使者を契丹に派遣し、また十一月には恒例の賀冬至使を派遣して恭順の意を示した。しかしほどなくして聖宗の親征の報が高麗に傳わる。十一月中旬、聖宗は自ら大軍を率いて鴨綠江を渡り、興化鎮を圍んだ。興化鎮の守備兵が

頑強に抵抗したことから、聖宗は軍を通州に移して康兆と對峙し、康兆軍を撃破して康兆を捕らえて處刑した。そして十二月には破竹の勢いで開京に迫った。身の危険を感じた顯宗は十二月二十八日、后妃らと共に開京を脱出して羅州を目指して南下する。顯宗が開京を脱出して三日後に當たる統和二十九年（一〇一一）元日に聖宗は開京に入城し宗廟・宮闕・民屋に火を放ったため、開京は灰燼に歸した。

聖宗の開京入城の前日、大晦日に楊州に宿った顯宗は河拱辰等を講和の使者をたてて契丹の陣營に派遣し、顯宗が契丹へ入朝することを條件に講和する。これ以降聖宗は軍を南に進めず開京に留まり、正月十一日に軍を引き揚げ、二十九日に鴨綠江を渡って歸國した。

一方、開京を棄てて逃亡した顯宗一向は楊州・廣州・陽城・蛇山などを過ぎてひたすら南下し、正月十三日に全羅道の羅州に入ったが、この日に契丹兵が開京を引き揚げたことを知る。顯宗は二月二十三日に開京に還ったが、四月には契丹に遣使して班師を謝した。この後も高麗は契丹との關係安定を優先させ、秋八月に康兆の一味を流罪に處するに及んで使者を契丹に派遣して顛末を報告し、また、常例の通りに冬十月には賀冬至使、十一月には賀生辰使を派遣した。しかし講和條件であった顯宗の入朝が一向に實現されないことが契丹側から問題視される。顯宗三年（一〇一一）六月に高麗は夏季問候使として田拱之を派遣し、顯宗が病のため入朝を辭したことを奏上したため、激怒した聖宗は興化・通州・龍州・鐵州・郭州・龜州の六城を還付することを命じた。この六城は成宗十二年（九九三）に契丹から侵攻を受けた際に、高麗が契丹への朝貢の通路を開く名目で契丹から領有を認められた鴨綠江東方の地域であり、この地に住む女眞を經略するたために高麗が築城したものである。これ以降、六城を巡って契丹と高麗の争いが激化するのである。

以上が顯宗即位以來直面した契丹聖宗の親征の概略である。これまで見てきたように、高麗は一貫して契丹との衝突を回避することに盡力した。しかし、高麗の努力に關わらず契丹が強硬な姿勢を崩さなかつたため、最終的には武力衝突に至り、結果として高麗は契丹に屈服し、そのうえ契丹へ服屬した後も六城の返還を求められることとなった。契丹の對應

は高麗において對契丹强硬派が活動する背景となった可能性がある。

第二節 顯宗即位後の智宗の活動

本節では、顯宗が即位してからの智宗の活動を確認する。人生の晩年に當たるこの時期の智宗の行動もやはり高麗の外交と聯動しているのである。

顯宗即位年（一〇〇九）、智宗は大禪師に除せられて廣明寺に住むようになり、また法號に「寂然」を加えられる。そして顯宗四年（一〇一三）に智宗は王師に冊封されるが、この年には契丹と六城の歸屬を巡る激しい外交問題が発生しており、翌年には北宋に朝貢を打診している。北宋と契丹の間で搖れる、緊迫した政治状況下において、智宗は王師に任じられて⁽⁷⁴⁾いることが分かる。顯宗六年（一〇一五）に高麗は郭元を北宋に派遣し、契丹の侵掠を北宋に訴えている。郭元は翌年正月に歸國し、北宋からの積極的な援助を得られないという報告をするのであるが、郭元の歸還以降高麗は北宋の年號を再び使用するようになることからも分かるように、使節を派遣した時点で既に外交の方針が定まっていたのである。⁽⁷⁵⁾智宗が王師である時期の高麗は、北宋との外交関係を再開し契丹に對抗することを目指した時期であった。智宗の王師任命もこうした高麗の外交方針に沿うものである。王師に任じられてからの智宗は高麗國王を導き、多くの民衆を救済したとある。⁽⁷⁶⁾

顯宗九年（一〇一八）、智宗は八十九年の生涯を閉じる。智宗の三回忌に當たる顯宗十一年（一〇二〇）、高麗は契丹との關係改善を圖り契丹へ遣使し、その一方で北宋にも金猛を派遣して二面外交の様相を呈する。これは「北宋への事大を續ける」か「契丹へ事大する」かで國內の議論が分かれていたことを示している。そして顯宗十二年（一〇二二）、契丹へ服屬する旨を北宋に傳え、⁽⁸⁰⁾翌年北宋との關係を途絶し、契丹の冊封を受けることになる。⁽⁸¹⁾こうした情勢において建てられた

「開城興國寺石塔碑」⁽⁸²⁾を確認する。

菩薩戒弟子平章事姜邯贊

奉為

邦家永泰遐邇常安敬造

此塔永充

供養

時天禧五年五月 日也

平章事姜邯贊⁸³が高麗國の平和を祈って建立したことが記されている。この碑を建てた姜邯贊は顯宗十年（二〇一九）に龜州で契丹軍に壊滅的なダメージを與え、後に人格化される人物である⁸⁴。天禧は北宋の年號で、天禧五年は一〇二二年に當たる。顯宗十二年（天禧五年、一〇二二）六月に高麗は北宋に遣使し、契丹に事大することを通達したのであるから、契丹へ事大するか北宋との關係を續けるかで議論が起こっていた最中に「開城興國寺石塔碑」が作成されたことが分かる。後の話になるが、顯宗二十年（二〇二九）興遼國が契丹に叛したため契丹から支援を求められた際に郭元は契丹の混亂に乗じて鴨綠江東畔の地を取る事を進言する。崔士威・徐訥・金猛等の反對にも関わらず郭元の案が通り、高麗は軍事行動に出るも失敗に歸するのであるが、⁸⁵ともすれば契丹との戦端を開きかねない郭元の提案を支持する勢力が一定の力を持っていたことに注意したい。その勢力の一部が顯宗十二年の時點で契丹への事大に消極的であった勢力であったのではないかと思うのである。高麗政府が契丹との講和に向けて決して一枚岩ではなかつた中で、姜邯贊がどのような立場であったかは不明であるが、高麗國の存續を強く願っていたことが読み取れる。

高麗が契丹に事大することを北宋に傳えたのは顯宗十二年であるが、その前年に當たる顯宗十一年（二〇二〇）に法相宗の法鏡が王師に任じられている（表1参照）。従来、顯宗即位後の法相宗擡頭の要因として①即位前の顯宗（王詢）が藏

義寺や神穴寺など三角山の法相宗寺院からの保護を受けていた點。②契丹の聖宗に侵掠され南遷した際に顯宗は安山金股傳の娘を娶ったが、安山金氏は三角山南の漢江流域を中心とした土豪の後裔であり、それ故に法相宗と深い関係があった點などが挙げられている。⁽⁸⁶⁾

従來の見解に加えて、高麗の外交方針との關聯を考えるべきである。契丹においては聖宗代（九八三—一〇三一）も法相宗が隆盛しており、國際的な活躍をした契丹の法相宗僧侶（燕京憫忠寺證明など）も存在していた。⁽⁸⁷⁾ 法相宗は契丹で盛んな宗派であったことから、法鏡を王師に任じて高麗佛教界の頂點に位置附けたことは契丹との關係改善を目指す姿勢を示すものであったと言える。

ところで、顯宗代の高麗における法相宗の隆盛の象徴として玄化寺の創建が注目される。玄化寺は智宗の歿年の顯宗九年（一〇一八）六月、顯宗の兩親である安宗（王郁）と獻貞王后の冥福を祈る願利として創建された。⁽⁸⁸⁾ 顯宗は玄化寺に新鑄した鍾を自ら撃ち、⁽⁸⁹⁾ 立碑を観るとともに篆額を自ら書した。⁽⁹⁰⁾ そして玄化寺を経済的にも優遇していた。⁽⁹¹⁾ 崔炳憲が指摘するように、この時玄化寺に施納されたのは對契丹のために用意された屯田であり、屯田を施納したのは對契丹戰時體制を解除するものであったと理解すべきであろう。⁽⁹²⁾

第三章第二節で指摘したように、六城をめぐる外交問題に直面した高麗において、「契丹に事大するか」「北宋との事大を繼續するか」という二つの外交方針が存在した。一度は郭元を派遣し北宋への事大を決めた高麗であったが、しかし現實的に北宋からの積極的な援助を得られない以上、北宋との關係を斷絶して契丹に事大することは時間の問題であった。こうした情勢において、法相宗の法鏡を玄化寺の住持に拔擢し王師に任命したのは、契丹への事大を前提として國內における言論を調停することが期待されていたからであろう。一方で、これまで詳細に見てきた通りの經歷から、北宋との關係に望みをかける立場に近かったと思われる禪宗一派は王權との距離を置くこととなった。高麗の外交方針の變化にこそ、王師のポストが禪宗のものから華嚴宗・法相宗のものへと移り変わっていった要因をみることができよう。

結 語

本稿では光宗代から顯宗代までの高麗佛教と國際情勢との關係を考證した。本稿の主人公である智宗は青年時代を高麗國王と關係の近い名僧達のもとで過ごし、中國へ渡ると延壽・義寂のもとで修業した。そして豫てより注目されてきた高麗から吳越國への經典傳達に關して、國清寺の義寂のもとへ高麗の經典を届けた現場に居合わせた蓋然性が高い。また傳教院で佛法を教授したことから、智宗の學識は中國で廣く認められており、智宗が義天に先行する國際的學僧であったことは明白であったと言えよう。こうした中國での輝かしい經歷を持つ智宗は歸國後、高麗が契丹の壓迫を受ける緊迫した狀況下で國王と接近する。それは筆者が推測するように、『大藏經』と宋太宗の「御製佛乘文集」を輸入する上で智宗と贊寧との關係を利用するためであろう。その後、澶淵の盟が締結されて契丹の高麗に對する態度が硬化し、「契丹に妥協しても報われない」と判斷した高麗は外交方針を轉換し、再び北宋に事大する。こうした外交の轉換時期に王師に任じられたのが智宗であり、智宗が王師である期間は北宋への事大の姿勢が崩れることはなかった。再度契丹への事大を決議するのは智宗の三回忌に當たる顯宗十一年（一一二〇）であった。以降、高麗の契丹への事大は睿宗十一年（一一二六）まで續く。

時は流れて睿宗二年（一一〇七）正月、禪僧の曇眞が王師に任命された。智宗以降凡そ八十年ぶりとなる禪宗からの王師任命であったが、その際、金縁（後に金仁存と名前を改める。以下では金仁存に統一）が曇眞の王師任命に反對して睿宗を諫めていた。⁹⁴ 王師の任命に反對の聲が擧がったのは管見の限りこの事例しか確認できず、極めて異例のことであった。金仁存は遼使の學士孟初との交流が特筆されており、先代の肅宗（在位一〇九五―一一〇五）が亡くなった時には契丹へ哀を告げに行っているだけでなく、女眞と九城を巡る軍事衝突が起きた際には契丹の立場に沿った意見を上奏している。⁹⁵ そして、北宋に使節として赴いた際には徽宗の歡待を受けながらも「帝我が國に厚くして、享禮常に異なると雖も、然も時事

を觀れば、華侈太甚だしきをば嘆くべし。」と言い放ち、また歸途に父の訃報に接すると喪に驅けつけて使者としての役目を全うしなかつたため、禮を失していたと譏られて⁹⁷いる。「高麗史」の列傳から讀み取れる金仁存の人物像は、北宋よりも契丹との關係を重視する人物である。契丹との關係が深かつた金仁存が曇眞の王師任命に頑強に反對したのは、曇眞を王師に任命することが契丹との關係に悪影響を與える可能性があるかと憂慮したからに違いない。それは高麗前期において王師を任命することと事大關係とに相關關係があつたからである。

本稿は王師と外交という切り口から主に光宗代から顯宗代の高麗政治史を論じた。そのため、高麗國內政治における意思決定の在り方について、恰も外交關係から全て語れるかのような印象を與えるかもしれない。筆者の力量不足により意見を盡くしていない恨みがあるが、紙幅の都合もあり、一つの視座からの提案と了解されたい。より具體的な高麗國內での意思決定の在り方については今後の課題としたい。

註

- (1) 許興植は、王師國師の冊封は高僧の任命という側面だけでなく當時優勢であつた宗派への特惠であつたとする。許興植(一九七五)三五〜四二頁。これ以降、王師國師の任命が高麗における宗派の勢力を推し量る一つの基準として使われるようになった。
- (2) 確實な王師追贈事例は韶顯・道誥の二例で、共に肅宗代(在位一〇九五〜一一〇五)。「高麗國尙州驪陽山鳳巖寺王師贈諡靜眞大師圓悟之碑銘并序」に出てくる道憲王師については議論が分かれているが、本稿では立ち入らない。
- (3) 高麗前期の國師・王師の機能・權限に関する許興植の分析は許興植(一九八六d)四〇六〜四一〇頁参照。これに對し、高麗後期の國師・王師は實質的な機能・權限を持っていた、とする。許興植(一九八六d)四一〇〜四一七頁。
- (4) 朴胤珍(二〇〇六)七八〜八八頁。
- (5) このうち、惠居(智□)の墓誌に關しては眞贋のほどにも疑問が残るが、筆者は實物を確認できていないので、本稿では朴胤珍の議論に従ふこととする。
- (6) 『韓國金石文大系』卷七、江原道篇。
- (7) 國師。國師之稱、蓋如中國之有僧職綱維也。其上二等、謂之王師。王見則拜之。(中略)阿闍梨大德。(中略)國師・三重大師不過數人而阿闍梨一等人數極衆。四庫全書本・知不足齋叢書本は「大師」

の二字を缺く。

- (8) 「事大」は『孟子』梁惠王章句下、齊宣王が孟子に隣國との交流の仕方を尋ねた話を典故とし、謂わば中國と小國との間における一種の外交理念である。冊封・賜印・頒曆といった諸形式を遵守した上で、各種の使節を派遣することとが求められた。本稿では冊封と年號の使用を事大の要素として重視している。

- (9) 「智宗碑文」 病而彌亮、顧以真冷謂衆曰「昔、如來以大法眼付諸弟子、如是展轉、乃至于今。今將此法付囑於汝。汝當護持、無令斷絕。吾滅後亦不得以喪計奏聞、有亂規矩。」言訖示化。

- (10) 葛城末治(一九三五)、金龍善(一九九六)。

- (11) 碑文には「開寶三年」とあるが、「開運三年」の間違いであろう。

- (12) 金龍善(一九九六) 九一〜九二頁。

- (13) 許興植(一九八六e) 三六六頁。

- (14) 김유지(二〇一六)。

- (15) 峻豐年號の使用例の一つが、本稿で扱う「智宗碑文」である。この時期の高麗は避諱の習慣が定着していないことから、峻豐は光宗の定めた独自の年號であると理解した。今西龍(一九一一)は疑問の餘地ありとしながらも峻豐を「建隆」の避諱とみるが、採用しない。

- (16) 『佛祖統紀』卷八、興道下八祖紀第四、には開寶元年、福州漕使の顧承徽が高麗人僧侶である義通のために自宅を喜捨して傳教院としたことが記されている。義通は義寂の

高弟であり、『佛祖統紀』では天台十六祖として立傳されている。發足したての傳教院において、師と同國人の智宗が呼ばれたのであろう。

- (17) 『高麗史節要』卷三、顯宗九年四月條。庚午。黃霧四塞、凡四日。京城多患瘴疫、分遣醫療之。

- (18) 宋白曰、晉天福中、有西域僧襪囉來朝、善火卜。俄辭高祖、請遊高麗。王建甚禮之。時契丹併勃海之地有年矣。建因從容謂襪囉曰「勃海本吾親戚之國。其王爲契丹所虜。吾欲爲朝廷攻而取之、且欲平其舊愆。師廻、爲言於天子、當定期兩襲之。」襪囉還具奏、高祖不報。出帝與契丹交兵、襪囉復奏之。帝遣郭仁遇飛詔諭建、深攻其地以牽脅之。會建已卒、武(Ⅱ代惠宗)知國事。與其父之大臣不叶、自相魚肉。內難稍平、兵威未振、且夷人怯懦。襪囉之言、皆建虛誇誕耳。

- (19) 是日、詔曰、西天中印土摩竭陀舍衛國大菩提寺三藏阿闍梨沙門室利縛羅、宜賜號弘梵大師。なお、殿本では避諱により「弘」が「宏」に改められている。

- (20) 二十一年春三月、西天竺僧弘梵大師啞哩囉日羅來。本摩竭陀國大法輪菩提寺沙門也。王大備兩街威儀、法駕迎之。

- (21) 弘梵大師の高麗訪問の背景には、九三七年に高麗と後晉の通交が開始されたこととの關聯が指摘されている。李龍範(一九八九)。

- (22) 金龍善(一九九六) 九二頁。

- (23) 金龍善(一九九六) 九一〜九二頁。

- (24) 「高麗國尙州曦陽山鳳巖寺王師贈諡靜真大師圓悟之碑銘

- 并序』『韓國金石文大系』卷三、慶尙北道篇。葛城末治
 (一九三五)三四二―三四六頁。
- (25) 金龍善(一九九六)九二頁。
- (26) 葛城末治(一九三五)三四六―三五二頁。
- (27) 『高麗國廣州慧目山高達院故國師制贈諡元宗大師慧眞之塔碑銘并序』『韓國金石文大系』卷五、京畿道篇(以下「元宗大師碑文」) 遂奉師、號爲證眞大師。
- (28) 金杜珍(一九八三)などの從來の研究では、智宗が延壽のもとへ參じたことの一事をもつて延壽の思想と智宗の思想を同一視している。無論、史料の制約から智宗の思想傾向を探ることは困難である。しかし智宗の思想が延壽の思想と同一だと假定するにしても、從來の研究が想定していた「延壽＝教禪一致」或いは「延壽＝禪淨一致」という理解は元代以降成立したものに過ぎないことが文獻學的手法から明らかにされている。柳幹康(二〇一五)三二六―三七五頁。そのため、智宗に關しても單純な「教禪一致」で理解してはならない。
- (29) 柳幹康(二〇一五)一六―二三頁、を參考にした。
- (30) 『宋高僧傳』が錢弘俶を媒介として高麗に典籍を求めさせたことを載せない點に關して、竺沙雅章は宋に歸順して聞かない吳越王の事績を顯彰することを贊寧が忌避した可能性を指摘している。竺沙雅章(二〇〇〇b)六〇―六一頁。
- (31) 『宋高僧傳』卷第七、大宋天台山皞溪傳教院義寂傳三十三、參照。
- (32) 『佛祖統紀』卷八、興道下八祖紀第四、十五祖淨光尊者。傳法弟子百餘人、外國十人。義通實爲高弟。
- (33) 贊寧については、牧田諦亮(一九五三)・黃敬家(二〇〇八)參照。
- (34) 『佛祖統紀』卷四十四、法運通塞志第十、淳化二年條。敕翰林贊寧、充史館編修。
 なお、法運通塞志は未完成のまま出版された『四庫全書存目叢書』所收の初刻本時點では未刻であったため、和刻本を活用している。『佛祖統紀』の書誌學的檢討は會谷佳光(二〇〇八)・(二〇〇九)參照。
- (35) 『小畜集』卷二十、「左街僧錄通惠大師文集序」。
- (36) 太祖皇帝初幸相國寺、至佛像前燒香、問「當拜與不拜？」僧錄贊寧奏曰「不拜。」問其何故？對曰「見在佛不拜過去佛。」贊寧者、頗知書、有口辯、其語雖類俳優、然一適會上意、故微笑而領之。遂以爲定制。至今行幸焚香皆不拜也。議者以爲得禮。
- (37) 李基白(一九八二)一四二―一五一頁。
- (38) よく以下の史料が引用される。『高麗史』卷九十三、列傳卷六、諸臣一、徐弼。時光宗厚待投化漢人、擇取臣僚第宅及女與之。一日弼奏曰「臣居第稍寬。願以獻焉。」光宗問其故。對曰「今投化人、擇官而仕、擇屋而處。世臣故家、反多失所。臣愚誠爲子孫計。宰相居第、非其有也。及臣之存、請取之。臣以祿俸之餘更營小第。庶無後悔。」光宗怒。然卒感悟、不復奪臣僚第宅。
- (39) 金龍善(一九八二)九七―一〇〇頁。

- (40) 金龍善(一九九六)一〇二頁。
- (41) 『竺沙雅章(二〇〇〇b)』。
- (42) 『佛祖統紀』卷二十四、歷代傳教表第一。建隆元年「庚申盡三年」、吳越王錢俶、遣使往高麗・日本、求遺逸教乘論疏。建隆二年、高麗國遣沙門諦觀、持天台論疏、至螺溪。
- (43) 畑中淨園(一九五四)。
- (44) 『佛祖統紀』卷十、諸祖旁出世家第二、淨光旁出世家、高麗諦觀法師。觀師既至。聞螺溪善講授、即往參謁、一見心服、遂禮爲師。(中略)師留螺溪十年、一日坐亡。
- (45) 坦文が王師に任じられたのは光宗十九年(九六八)。歸法寺の創建は光宗十一年(九六〇)。
- (46) 一九七〇年代に、均如と光宗が協力して佛教界を統合した、という説が出て研究史における華嚴宗の比重が高くなった。金杜珍(一九七七)、金龍善(一九八一)など参照。
- (47) 『元宗大師碑文(碑陰)』『朝鮮金石總覽』(上) 乾德九年歲次辛未十月二十一日於元和殿開讀大藏經時、皇帝陛下(光宗を指す)。詔曰「國內寺院唯有三處、只留不動。門下弟子相續住持、代代不絶。以此爲矩。」所謂、高達院・曦陽院・道峯院。
- (48) 『宋高僧傳』卷二十八、興福篇第九之三、大宋錢塘永明寺延壽傳十二、參照。『宋高僧傳』の成立は端拱元年(九八八)であり、また著者の贊寧は延壽と交流があったことから、信憑性が高い。
- (49) 葛城末治(一九三五)三五〇頁參照。
- (50) 『高麗史節要』卷二、景宗元年十一月條。
- (51) 矢木毅(二〇〇八)八頁。
- (52) 『高麗史節要』卷二、成宗十二年十月條。
- (53) 『高麗史』卷九十四、列傳卷七、徐熙傳。
- (54) 『高麗史節要』卷二、成宗十三年二月條。始行契丹年號。
- (55) 矢木毅(二〇〇八)九頁。
- (56) 『宋史』卷四百八十七、高麗傳。(淳化)五年六月、遣使元郁來乞師、懇以契丹寇境。朝廷以北鄙甫寧、不可輕動干戈、爲國生事。但賜詔慰撫、厚禮其使遣還。自是受制于契丹、朝貢中絶。
- (57) 池内宏(一九三七a)。また、張東翼は成宗と穆宗に至るこの時期を高麗・契丹・北宋などの諸國の「共存の時期」としている。張東翼(二〇一五)。
- (58) 成宗は崔承老の建議に従い國家的な佛教行事を全て停止した。조경사(二〇〇〇)。
- (59) 『高麗史』卷百二十七、叛逆、康兆傳。兆廢穆宗、爲讓國公。(中略)兆、遣尙藥直長金光甫進毒。穆宗不肯飲。光甫謂隨從中禁安霸等曰「兆言、若不能進毒、可令中禁軍士、行大事、報以自刃。不爾、吾與若等俱族矣。」夜、霸等弑之、以自刎聞。取門扇爲棺、權厝于館。兆使人、以縣倉米、作飯祭之。
- (60) 『智宗碑文』 淳化中、以特飛芝詔、迎入藥宮、請啓高談、冀聞妙義。寧效少林之觀壁、且同宣室之話齋。載寤宸

- 襟、優承寵貺、仍受磨納蔭眷。
- (61) 『佛祖統紀』卷四十四、法運通塞志第十。(淳化元年)高麗國王治、遣使乞賜『大藏經』并『御製佛乘文集』。詔給之。(中略)(淳化四年)高麗國王治、遣使謝賜『藏經』『御製文集』。
- (62) 『佛祖統紀』卷四十四、法運通塞志第十。『御製佛乘文集』が具體的に何を指すのか詳かでないが、『高麗大藏經初刻本輯刊』所收の宋太宗『御製祕藏詮』『御製逍遙詠』『御製緣識』を指すか。
- (63) 義寂は雍熙四年(九八七)に、義通は端拱元年(九八八)に亡くなっている。
- (64) 『智宗碑文』 穆宗繼承先志、亦締勝緣、顧鶴儀而暫不曠時、垂鴻霈以略無虛歲。曩加「光天遍炤至覺智滿圓默禪師」、贈繡方袍、兼以佛恩寺・護國外帝釋院等爲住持之所焉。
- (65) 『高麗史節要』卷二、穆宗三年冬十月條。冬十月。創崇教寺、爲願刹。
- (66) 史料の翻刻は、京都國立博物館〔二〇一四〕の畫像により作成。
- (67) 二人の關係については池内宏〔一九三七b〕、李泰鎮〔一九七七〕に述べられている。
- (68) 澶淵の盟に關しては古松崇志〔二〇〇七〕参照。
- (69) 『高麗史』卷八十八、后妃傳一、景宗。獻哀王太后皇甫氏、戴宗之女。生穆宗。穆宗即位、册上尊號曰、應天啓聖靜德王太后。穆宗年已十八、太后攝政、居千秋殿、世號
- 千秋太后。與金致陽通而生子、欲以其子嗣王位。
- (70) 『高麗史』卷百二十七、叛逆、金致陽傳。忌大良君、逼令爲僧、屢欲害之。
- (71) 王詢が出家したことで、王室には金致陽と千秋太后の間に生まれた子供以外に王位繼承の資格者がいなくなったようである。何故なら康兆が擧兵して金致陽とその子供を殺害した後、わざわざ出家していた王詢を迎えに行き國王の座につけているばかりでなく、顯宗は即位後に、かつて宗族であったが罪を得て宗籍から除外された王琳・禎兄弟を宗族に復歸させているからである。これも宗室を再生するための政策であろう。『高麗史節要』卷三、顯宗三年三月條。太子詹事禎卒。太祖庶孫也。其父東陽君、險戾、交結群小、潛懷異圖、光宗賜死。禎與其兄左僕射琳、以幼獲免、逃竄民間、丐乞爲生。康兆用事、建議興復宗室、奏授一禎兄弟爵位、給臧獲田莊、始入屬籍。
- (72) 池内宏〔一九三七b〕、金泰鎮〔一九七七〕、金大淵〔二〇〇七〕参照。
- (73) 池内宏〔一九三七c〕、홍영의〔二〇一〇〕。
- (74) 『高麗史節要』卷三、顯宗五年八月條。八月、遣內史舍人尹徵古如宋、獻金線織成龍鳳鞍幘・繡龍鳳鞍幘各二・良馬二十二匹、仍請歸附如舊。宋帝詔登州置館于海次、以待之。
- (75) 『高麗史節要』卷三、顯宗六年是歲條。遣民官侍郎郭元如宋、貢方物、仍告契丹連歲來侵。
- (76) 『高麗史節要』卷三、顯宗七年正月條。郭元還自宋。

- 元之人宋、會女眞亦訴爲契丹騷動、累年不得朝。帝以契丹既受盟、難於答辭。(中略)敕元遊開寶寺。密使館伴員外郎張師德開諭。師德與元登塔、從容謂曰「今京都高屋大廈、摠是軍營。今陛下統一統寶海、猶且養卒、日令習戰、以備北方。天子猶且如此。況貴國與之連境、結好息民、是遠圖也。」
- (77) 『高麗史節要』卷三、顯宗七年是歲條。是歲、復行宋年號。
- (78) この時に郭元が北宋に持つて行った表文は『東人之文四六』事大、に収録されていて、北宋への事大を前提としたものであったことが確認できる。
- (79) 『智宗碑文』方推請益之誠、勉盡質疑之問、日改月化、聞斯行諸、師警歎一音、言提萬行、簾洪鍾而待扣、響應有緣、臺藻鏡以忘罷、炤通無礙、刺定水而資帝澤、廓真空而導皇風、其利博哉、爲弘濟也。
- (80) 『宋史』卷四百八十七、高麗傳、天禧五年條。(天禧)五年。詢遣告奏使御事禮部侍郎韓祚等一百七十九人來謝恩、且言與契丹修好。又表乞陰陽地理書。聖惠方、竝賜之。
- (81) 『高麗史節要』卷三、顯宗十三年夏四月條。夏四月。契丹遣御史大夫蕭懷禮等來、冊王開府儀同三司守尙書令上柱國高麗國王食邑一萬戶食實封一千戶、仍賜車服儀物。自是復行契丹年號。
- (82) 韓國の國立中央博物館所藏の拓本より翻刻。
- (83) 正史である『高麗史』『高麗史節要』では「姜邯贊」と表記されているため、本文では「姜邯贊」に統一する。
- (84) 姜邯贊が神格化されたことを伝える逸話は『高麗史』卷九十四、列傳卷第七や『韓國金石文大系』卷六、ソウル特別市編所収の「姜邯贊落星塔銘」などがある。
- (85) 『高麗史節要』卷三、顯宗二十年十一月條。參知政事郭元卒。(中略)及興遼叛、密奏曰「鴨江東畔契丹保障。今可乘機取之。」崔士威・徐訥・金猛等皆上書不可。元固執、遣兵攻之、不克。慚恚發疽而卒。
- (86) 崔炳憲(一九八一)二四九頁、許興植(一九八六b)二一六頁。
- (87) 竺沙雅章(二〇〇〇a)。
- (88) 『高麗史節要』卷三、顯宗九年六月條。始創玄化寺、以資考妣冥福。
- (89) 『高麗史節要』卷三、顯宗十一年(一〇二〇)九月條。王如玄化寺、親擊新鑄鍾。又令群僚擊之、各捨衣物匹段。
- (90) 『高麗史節要』卷三、顯宗十二年(一〇二二)八月條。王如玄化寺觀立碑、親象額。嘗命翰林學士周衍製碑文。
- (91) 『高麗史節要』卷三、顯宗十一年(一〇二〇)八月條。八月。以安西道屯田一千二百四十結施納于玄化寺。兩省再三論駁、不納。ちなみにこの年、法鏡が王師に冊封されている。
- (92) 崔炳憲(一九八一)二四三頁。
- (93) 「高麗國靈鷲山大慈恩玄化寺碑陰記」の「得見北朝差人再來請和好、及至戈戟偃藏、人民蘇息」という一文は、北朝(契丹)との關係安定により戦時状態から解放されることを願う一文として理解すべきである。

(94) 『高麗史節要』卷七、睿宗二年正月條。以僧曇真爲王

師。初王欲封真爲王師、以右諫議金緣爲封崇使。緣辭曰「臣職在諫院、已言封王師之不可、未蒙俞允。又從而行之、則是欺殿下也。」王強之再三、固辭不就。改命內侍柳臺樹。

(95) 『高麗史』卷九十六、列傳、諸臣、金仁存。金仁存、

字處厚、初名緣、新羅宗室角干周元之後。(中略) 遠使學士孟初至、仁存爲接伴。初見其年少、頗易之。嘗一日、竝轡出郊。雪始霽、茫然無所見。唯馬蹄觸地作聲。初唱云「馬蹄踏雪乾雷動。」仁存卽應聲曰「旗尾飄風烈火飛。」初愕然曰「眞天才也。」由是情好日篤、相唱和。及別、解金帶贈之。(中略) 肅宗薨、仁存告哀于遼。

(96) 『高麗史』卷九十六、列傳、諸臣、金仁存。王將伐東

女眞、大臣皆贊成之、仁存獨上疏極諫、不報。及尹瓘等破女眞築九城、女眞失窟穴、連歲來爭、我兵喪失甚多。女眞亦厭苦、遣使請和、乞還舊地。群臣議多異同、王猶豫未決。

仁存言「土地本以養民。今爭城殺人、莫如還其地以息民。今不與、必與契丹生釁。」王問其故。仁存曰「國家初築九城、使告契丹表稱、女眞弓漢里、乃我舊地、其居民亦我編氓。近來寇邊不已。故收復而築其城。」表辭如是、而弓漢里酋長、多受契丹官職者。故契丹以我爲妄言、其回詔云「遠貢封章、粗陳事勢、其間土地之所屬、戶口之攸歸、已敕有司、俱行檢勘、相次別降指揮。」以此思之、國家不還九城、契丹必加責讓。若東備女眞、北備契丹、則臣恐九城非三韓之福也。」王然之。

(97) 『高麗史』卷九十六、列傳、諸臣、金仁存。遷祕書監、

奉使如宋。徽宗待之甚厚、屢賜宴、宴器皆用白玉。仁存以爲「帝厚我國、享禮雖異常、然觀時事、華修太甚可嘆。」還至慶源郡、聞父喪、以使事付其介、遂奔喪不復命。時人譏其失禮。

【史料】

『御製祕藏詮』影印本、『高麗大藏經初刻本輯刊』第七七册、第七八册、西南師範大學出版社

『御製道遙詠』影印本、『高麗大藏經初刻本輯刊』第七八册、西南師範大學出版社

『御製緣識』影印本、『高麗大藏經初刻本輯刊』第七八册、西南師範大學出版社

『宗鏡錄』影印本、『高麗大藏經』第四四册、補遺Ⅰ、東國大學校出版部

『佛祖統紀』影印本、『四庫全書存目叢書』子部第二五四册、四十卷、卷二十一用鈔本補配十四册、法運通塞志未刻、齊魯書社

『佛祖統紀』和刻本、五五卷本、京都大學文學部圖書館藏

『景德傳燈錄』影印本、禪文化研究所編、基本典籍叢刊

- 『宋高僧傳』、『佛門典要』(上)(下)、范祥雍點校、上海古籍出版社
- 『孟子』影印本、『十三經注疏』嘉慶刊本、中華書局
- 『資治通鑑』影印本、上海古籍出版社
- 『高麗史』影印本、亞細亞文化社
- 『高麗史節要』影印本、學習院東洋文化研究所
- 『東人之文四六』影印本、啓明大學校出版部
- 『朝鮮金石總覽』(上) 朝鮮總督府編
- 『韓國金石文大系』卷三、慶尙北道篇、趙東元編著、圓光大學出版局
- 『韓國金石文大系』卷五、京畿道編、趙東元編著、圓光大學出版局
- 『韓國金石文大系』卷六、ソウル特別市編、趙東元編著、圓光大學出版局
- 『韓國金石文大系』卷七、江原道編、趙東元編著、圓光大學出版局
- 『舊五代史』中華書局
- 『宋史』中華書局
- 『遼史』中華書局
- 『歸田錄』中華書局
- 『小畜集』影印本、『景印文淵閣四庫全書』第一〇八六冊所收、驪江出版社
- 『宣和奉使高麗圖經』影印本、國立故宮博物院善本叢書
- 『京都國立博物館所藏名品120選 京へのいざない』京都國立博物館、(二〇一四)

【参考文献】

(日本語)

- 會谷佳光(二〇〇八)『佛祖統紀』宋版の出版をめぐるって——東洋文庫藏『四庫全書存目叢書』に寄せて『東洋文庫書報』第四〇號
- 會谷佳光(二〇〇九)『江戸時代における『佛祖統紀』の出版』『日本漢文學研究』第四號
- 池内宏(一九三七a)『高麗成宗朝に於ける女眞及び契丹との關係』『滿鮮史研究中世第二冊』

- 池内宏 (一九三七b) 「高麗穆宗期の禍亂」 『滿鮮史研究中世第二冊』
池内宏 (一九三七c) 「契丹聖宗の高麗征伐」 『滿鮮史研究中世第二冊』
今西龍 (一九一一) 「正豐峻豐等の年號」 『東洋學報』 第一卷
葛城末城 (一九三五) 『朝鮮金石攷』 大阪屋號書店
笠沙雅章 (二〇〇〇a) 「宋元時代の慈恩宗」 『宋元佛教文化史研究』 汲古書院
笠沙雅章 (二〇〇〇b) 「宋代における東アジア佛教の交流」 『宋元佛教文化史研究』 汲古書院
笠沙雅章 (二〇〇〇c) 「新出資料よりみた遼代の佛教」 『宋元佛教文化史研究』 汲古書院
畑中淨園 (一九五四) 「吳越の佛教——特に天台德韶とその嗣永明延壽について——」 『大谷大學研究年報』 第七號
古松崇志 (二〇〇七) 「契丹・宋間の澶淵體制における國境」 『史林』 第九〇卷第一號
牧田諦亮 (一九五三) 「君主獨裁社會に於ける佛教教團の立場(上)」——宋僧贊寧を中心として—— 『佛教文化研究』 三
矢木毅 (二〇〇八) 『高麗官僚制度研究』 京都大學學術出版會
柳幹康 (二〇一五) 『永明延壽と『宗鏡錄』の研究——一心による中國佛教の再編』 法藏館

(朝鮮語)

- 金大淵 (二〇〇七) 「高麗顯宗の即位と契丹の侵掠原因」 『韓國中世史研究』 二二號
金杜珍 (一九七七) 「均如の生涯と著述」 『歷史學報』 第七五・七六號
金杜珍 (一九八三) 「高麗光宗代の法眼宗の登場とその性格」 『韓國史學』 四號
金龍善 (一九八一) 「光宗の改革と歸法寺」 李基白編 『高麗光宗研究』 一潮閣
金龍善 (一九九六) 「高麗前期の法眼宗と智宗」 金福順ら共著 『江原佛教史研究』 翰林科學院叢書
김은익 (二〇一六) 「高麗光宗代僧階制の施行と佛教界の展開」 『韓國思想史學』 第五四輯
朴胤珍 (二〇〇六) 『高麗時代王師國師研究』 景仁文化社
李基白 (一九八一) 「高麗初期五代との關係」 『高麗光宗研究』 一潮閣
李龍範 (一九八九) 「胡僧襍囉の高麗往復」 『韓滿交流史研究』 同和出版公社
李泰鎮 (一九七七) 「金致陽亂の性格——高麗初西京勢力の政治的推移と關聯して——」 『韓國史研究』 第一七號
崔炳憲 (一九八一) 「高麗中期玄化寺の創建と法相宗の隆盛」 『史學論叢』 韓洵勳博士停年紀念

- 張東翼 (二〇一五) 「高麗時代に行われた對外政策の諸類型」 『韓國中世史研究』 四二號
- 조경시 (二〇〇〇) 「高麗成宗代の對佛教施策」 『韓國中世史研究』 九號
- 홍영의 (二〇一〇) 「高麗顯宗の羅州南幸時の公州經由の背景と意義」 『韓國中世史研究』 二九號
- 許興植 (一九七五) 「高麗時代の國師・王師制度とその機能」 『歷史學報』 六七號 (↓許興植 (一九八六d))
- 許興植 (一九八六a) 「華嚴宗の繼承と所屬寺院」 『高麗佛教史研究』 一潮閣
- 許興植 (一九八六b) 「瑜伽宗の繼承と所屬寺院」 『高麗佛教史研究』 一潮閣
- 許興植 (一九八六c) 「禪宗の繼承と所屬寺院」 『高麗佛教史研究』 一潮閣
- 許興植 (一九八六d) 「國師・王師制度とその機能」 『高麗佛教史研究』 一潮閣
- 許興植 (一九八六e) 「僧科制度とその機能」 『高麗佛教史研究』 一潮閣

(中國語)

黃敬家 (二〇〇八) 『贊寧《宋高僧傳》敘事研究』 臺灣學生書局

APPOINTMENT OF THE ROYAL PRECEPTOR IN THE EARLY GORYEO PERIOD AND ITS RELATION TO THE INTERNATIONAL SITUATION

NAKAMURA Shin'nosuke

This paper focuses on the life of Jijong 智宗, who was active during the period extending from the reign of King Gwangjong 光宗 (r. 949-975) to that of King Hyeonjong 顯宗 (r. 1009-1031), as well as on relations between Buddhism and Goryeo's politics.

The first section surveys the life of Jijong based on the primary historical source "Stelae Inscription of Jijong" 智宗碑文 and clarifies some aspects of the interactions between Buddhists in China and Goryeo at that time by analyzing biographies of his monastic teachers and his contemporaries. Since there were certain correlations between Goryeo's diplomatic relations and the appointment of the royal preceptor 王師, these are clarified in this paper, it is also essential to consider the international situation in which Goryeo was placed at that time.

The second section elucidates the relationship between diplomacy and Buddhism in Goryeo during the period from the reign of King Gwangjong 光宗 (r. 949-975) to that of King Mokjong 穆宗 (r. 997-1009). King Gwangjong recognized the political supremacy of the Later Zhou and the Northern Song dynasties and tried to centralize power in Goryeo by the means of stable international relations. This situation changed after the invasion of the Khitans, when King Seongjong 成宗 (r. 981-997) was in power. Goryeo, forced to yield to Khitan power, recognized the supremacy of the Khitans instead of the Northern Song. This section also contains information about the activity of Jijong and his participation in international relations of Goryeo.

The third section provides an overview of diplomacy and Buddhism in Goryeo from the appointment of Jijong as royal preceptor until his death. After complex diplomatic negotiations, Goryeo shifted its subordinate status from the Northern Song to the Khitans. Jijong was the last royal preceptor, who came from the Seon school 禪宗. For about 80 years following Jijong, royal preceptors were representatives of the Hwaom school 華嚴宗 and the Beopsang school 法相宗.

This paper traces the political and diplomatic history of Goryeo until the end of military struggle with the Khitans and the appointment of Beobgyeong 法鏡 as royal preceptor and presents correlations between Goryeo's diplomatic policies and

role of Buddhists within them.

THE QIN'S CONCEPTS OF STATE AND CAPITAL DISTRICT DURING THE WARRING STATES PERIOD

WATANABE Hideyuki

This paper reconsiders several important aspects of the Qin's concepts of state and capital district during the Warring States period, particularly in terms of inter-regional relationships and the process by which they expanded their area of dominion.

In this paper I considered three major issues. First, I reconsidered the character *bang* 邦 that appears in Qin period documents. While *bang* basically means nation or state, it also had a range of ambiguous uses, with recent theories being posited that *bang* referred only to the capital district, the central precinct. This paper refutes that theory, stating that the only specific examples of the term referring solely to the capital district are found at an older stage of the legal system when the Qin domain was limited, and thus clarify that *bang* refers to the state or city-state.

Second, I analyzed the terminology used to differentiate areas within the Qin domain, and those to indicate the capital district. Earlier scholarship has strongly supported the theory that the Qin strictly differentiated between *guqin* 故秦 or "district of original dominion" and those areas and populace outside that district, which were newly under their rule. Those theories further believed that *guqin* was a "set state". However, reexamination of related historical documents indicates that it is wrong to interpret *guqin* as a "set state." Rather, strict differentiation and exclusion was no longer apparent during the Qin's process of expanding its territory and absorbing new populations.

Third, I confirmed the terminology used for the Qin capital district, and sought the process by which the state government system was applied to the newly acquired regions. This process clarified the following various points. Namely, until the late Warring State period the Qin established a division between the center *zhong* 中, specifically the ruler's capital district, and *jun* 郡, the provincial government. However, the Qin applied their existing legal framework essentially unchanged as they expanded their territory from the former to include the latter. Thus the relationship between capital district and provincial government was not